

※報告番号 応 甲 第 号
不 乙

学位論文等審査結果報告書

応用言語学研究所

学位論文審査委員会

主査 木山三佳	印	副査 遊佐昇	印	副査 中川仁	印
		副査	印	副査	印

学 籍 番 号	86160001	氏 名	範弘宇
学位論文題目	日本語学習者の要求場面のコミュニケーション —間接要求の理解と産出を焦点に—		
学位論文審査結果	<input checked="" type="radio"/> 合 · 否	最終試験結果	<input checked="" type="radio"/> 合 · 否

学位論文審査及び最終試験結果の要旨

コミュニケーション場面の中でも、要求の意図を伝達するのは第二言語話者にとって言葉の選び方が難しいと感じるものである。また、日本語教育においても指導対象となることが多いコミュニケーション場面の一つである。相手との関係を良好に保ちながらも相手に負担をかける要求の意図を伝達するために、間接的な表現が使われることも多いことから、正しい理解もまた容易ではない。本論文はそのような間接要求表現を日本語学習者が理解したり、産出したりする際に、どのような言語処理がなされるのかを日本語母語話者との比較によって解明しようとしたものである。

本論文は言語使用の処理過程モデル (Levelt, 1993) の言語理解の解析処理と言語産出の形式処理部分に焦点を当て、さらに第一言語話者と第二言語話者の心的辞書の違いについては Wray(2002)の心的辞書モデルから着想を得ている。

研究 1 では日本語の教科書を分析し、日本語母語話者が想起する間接要求表現と教科書で扱う間接要求表現の違いを分析している。その結果、両者は必ずしも一致しない、日本語母語話者が想起する間接要求表現を教科書で習得するという可能性は低いことが分かった。

研究 2 では、間接要求表現「～がある(か)」に絞って、その産出と理解を日本語学習者の初級と上級で比較し、さらに日本語母語話者と横断比較をしている。その結果、初級学習者に比べて上級学習者の方が間接要求表現「～がある(か)」を理解できるが、「～がある(か)」を間接要求表現として産出することは初級・上級どちらも少なく、産出のほとんどが第一義である「存在」の意味であった。

研究 3 は言語理解の解析処理を扱っている。日本語学習者と日本語母語話者に場面と要求表現を聞いて、どのような反応をするかを選択するという実験を行い、事後インタビューで要求の意図理解についての内省を求めた。日本語学習者と日本語母語話者の比較分析の結果、日本語母語話者と学習者の理解に差がみられたものは 1 例である。学習者は要求表現に従って行動していた場合でも間接要求表現の形式の第一義の意味機能で理解することが分かった。

研究 4 は言語産出の形式処理を、無声ビデオを視聴し談話完成を行うという実験によって日本語学習者と日本語母語話者の比較を行っている。日本語母語話者と比べて学習者は直接要求表現よりも間接要求表現を産出する割合が高かった。また、産出する表現形式のバリエーションは、学習者の産出する表現形式は誤用も含みバリエーションが多かった。

これらの研究から、日本語学習者の間接要求表現の理解と産出の認知過程を母語話者との比較において仮説を提示した。その仮説では、学習者の理解の認知過程では語彙や文法を分析的に処理し、場面や状況からの推測などで不足している理解を補い、一方産出においては、学習者は意図を形式処理する場合、語彙や文法などを検索し分析的に文を生成するとしている。

審査においては、研究方法、結果の背景となる原理に対する考察などについて質問がなされ、適切に回答していた。

以上の結果、範 弘宇 は博士(応用言語学)の学位を得る資格があると認める。